

# APAA年次大会レポート

2012年10月27日から31日まで、タイのチェンマイで行われたアジア弁理士協会 (APAA) の第16回総会に参加した。メンバー 24 カ国 (地域) からの参加者のみならず、北米、中南米、中東、ヨーロッパ、アフリカなど世界各国からのオブザーバー参加者が一堂に会した5日間を振り返ってみよう。

YKI 国際特許事務所  
弁理士 特定侵害訴訟代理人  
商標グループ ジェネラルマネージャー

葦原 エミ



Shangri-La Hotel Chiang Mai

## 1. APAA会合公式行事

APAAでは毎年10～11月ごろに年次大会が行われるが、3年に一度、総会が開かれ、新たな理事と会長が選出される。2012年はその3年に一度の年に当たり、旧理事による第60回理事会と新理事による第61回理事会に加え、第16回総会が開催された。

今年の会場は、格調高いShangri-La Hotel Chiang Mai。最終日までここがAPAAの舞台となる。

### ——10月28日：オープニング・セレモニー

全参加者が真っ先に向かうのは、レジストレーション・デスクだ。ここで国名と自分の名前が書かれたバッジとバッグ、遠足用のTシャツと帽子を受け取る。この“APAA全員おそろいグッズ”を身に着けていれば、エレベーターに乗っても道を歩いても、“仲間”と分かるから、気軽に声をかけられる。バッジをつけると「さあ、始まるぞ!」という気になってくる。

多くの一般参加者にとって、APAAの年次大会は28日夜のオープニング・セレモニーで始まる。

艶やかなタイの伝統舞踊と音楽を交え、タイ知財局長のスピーチの他、WIPOのGurry事務局長からもビデオ・メッセージが寄せられていた。

続いて、9代目会長の吉田研二氏から、今日におけるAPAAの使命を伝えるメッセージと開会宣言がなされた。その概要は以下のとおり。

「今やアジアは労働の源からアイデアの源となり、世界における発言力を増している。資源が枯渇していくなか、グリーン・テクノロジーの重要性が高まっているが、APAA会員こそが、グリーン・テクノロジーの発展とシェアに大きく貢献していく一翼を担っており、その知財保護に寄与していかなければならない」

そして一同は、プールサイドに用意されたレセプション会場に移動し、ワインを片手に深夜まで歓談が続いた。

### ——10月29日：常設委員会

翌日の午前中は、各種委員会が開かれた。委員会では、各国の制度改正等についての報告の他、毎年あらかじめ用意されたトピックについて委員たち

によって議論が交わされる。委員でない者も出席は可能で、質問したり、意見を述べることができる。

今回の各委員会のテーマは、以下のとおりである。

|         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| 模倣対策委員会 | 並行輸入に対する法的措置                       |
| 著作権委員会  | ソーシャルメディアの台頭で、著作権領域を再考する必要性が生じてきたか |
| 意匠委員会   | 特許庁に対する手続き等                        |
| 特許委員会   | 進歩性等のハーモナイズ                        |
| 商標委員会   | 著名商標保護                             |

筆者がギャラリー参加した商標委員会では、毎年、同じ課題や事件がメンバー各国ではどのように判断されるかといった、一種のケーススタディーの紹介がなされるが、「どこでも似たような考え方をするんだな」ということもあれば、「国によってこんなにも判断が違うのか」と驚くこともあり、大変勉強になる。

今年は、以下の8つの質問について、15の部会から回答がなされた。



APAA年次大会レポート

——10月30日：エクスカーショ  
ン & Japan Friendship Night

翌日は、みんなが楽しみにしている“遠足”だ。14種類ものプログラムが用意され、象に乗ってはしゃぐ者もあれば、ゴルフにいそむ者もいる。

筆者は市内観光でWat Pra Singh等の寺院を訪れた。仏像を前にすれば自然と手を合わせ、<sup>おごそ</sup>かな気持ちになる。「国は違えど、同じような文化を共有しているんだな」としみじみ思った。

こうしたツアーはバスで集団移動するが、ガイドがランチ会場の説明と併せ、「ベジタリアンの方は？ ハラル（イスラム教の戒律に従った食事）が必要な方は？」と確認する。

さまざまな宗教や信条を持つ人たちの集まりだから当然なのだが、日本にいたところこうした配慮にまで頭が回らないことが多く、改めて感心させられた。

|                                                                      |
|----------------------------------------------------------------------|
| 1. 外国でのみ著名な商標を、自国においても著名と認定できる場合があるか                                 |
| 2. 著名といえるためには全国で知られている必要があるか、1地域でいいか                                 |
| 3. 自社の著名商標について第三者が登録を受けてしまった場合、無効とする前でも第三者の使用を止められるか                 |
| 4. 著名商標リストは存在するか                                                     |
| 5. 著名商標の所有者は、それと同一・類似のドメインネームの使用を止められるか                              |
| 6. 著名性の証明に必要となる証拠（売上高やマーケットシェア、市場調査、著名商標リストへの記載、広告やメディア、海外での登録、等々……） |
| 7. 著名商標の登録制度はあるか                                                     |
| 8. 著名商標の権利範囲は、著名でない商標が登録された場合の権利範囲より狭いか、広いのか                         |

商標の識別力や類否判断のように、国によって回答に差が生じる可能性のある質問でもないが、著名商標リストや著名商標保護制度の存否は多くの参加者の関心事である。

現在、著名商標保護制度がない国の代理人からも、「制度の必要性があると感じているか？ その理由は？」といった点についてそれぞれの見解を聞くことができたのは、非常に有意義だったと思う。

この日の午後は、「カネのなる木としてのIP——ただし、ちゃんと植えて育てれば」といったタイトルのワークショップが開催された。これも参加は自由。個別のミーティングに忙しく、会場内を駆け回る人たちもいる。

ひと息ついて、快晴だったこの日の夜は“カルチュラル・ナイト”と称する野外ディナーが催された。

屋台のタイ料理や手工芸品のデモンストレーション、タイの民俗舞踊などを楽しむ。「1年ぶりだね！」と声をかけてくれる人、友人を紹介してくれる人など、交流の輪が広がる。



大会の会期中、ビジネス目的で事務所等がレセプションを行うことをAPAAでは禁止している。

公式行事に参加して、多くの人と親交を深めてほしいという趣旨なのだ。

ただ、遠足の日の夜だけは、APAAによるディナーはない。もとより友人との会食を禁止しているわけではないから、遠足後の夜は、みんな仲の良い人たちで出かける。

ここは自分が信頼できる代理人たちを紹介し合う場にもなっている。こうした小さな集まりも貴重だ。

実はこの夜、APAA日本部会は“Japan Friendship Night”というレセプションを催した。本音を語ると、「海外に来てまで、なぜ日本人だけで集まる必要があるのか」と疑問を持っていたが、参加してその真意を理解した。

APAAは1960年代、知財といえば欧州が中心だった時代に、アジアの意見を結集すべく、日本の弁理士の呼びかけで設立された経緯を持つ。

つまり、数ある知財の国際組織の中でも、日本がリーダーシップを執って発足したのはAPAAが唯一といえる。創設当時のメンバーは、おそらく強い使命感を持っていたに違いない。時代が変わり、当時の志を知る者も少なくなってきた今、「歴史を再認識し、そのプレゼンスを高める使命感を持とう！」と若い世代に伝えることがこのレセプションの願いであったようだ。

## ——10月31日：総会・理事会

### & ガラ・バンケット

最終日は、総会・理事会に続き、ガラ・バンケットが催された。例年、会長候補は1名だったが、今年はオーストラリアと香港から2名の候補が現れ、APAA初の会長選挙があるとのことで、初日から「次期会長は誰に？」と多くの者は興味深々であった。

理事たちによる選挙の結果、香港のChi Keung Kwong氏が選出され、ガラ・バンケットで参加者に紹介される。

こうしてAPAAの“祭典”は終了。外では大きなランタンがいくつも用意され、気球のように空に飛ばしながら、みんなで空を見上げる。無数の星のようで、とてもきれいだった。

## 2. ひと言でいえば“フレンドリー”

ここまでお読みいただいて、どのような感想を持たれただろうか？

知財の世界ではさまざまな国際組織があり、いずれも年次大会のような会合が催されている。参加資格・人数も組織によって異なるが、オープニング・セレモニーから始まって、会議やセミナー、レセプション、ガラ・バンケットが公式行事としてあり、それ以外はひたすら個別のミーティングを重ねるという点では似たり寄ったりである。

しかし、よく知られているINTA、AIPPI、FICPI等の会合と比較して、「APAAは何が違う？」と聞かれれば、

たいていの人は、まず間違いなくその“フレンドリーさ”を挙げるだろう。

参加者数が8000人ともいわれる大規模なINTAの年次大会と比べれば、オブザーバー参加を加えても、APAAは約1300人と規模は小さい。

しかし、そのほぼ全員が、舞台となるコンベンション・センターなどの会場近辺に宿泊し、4～5日間、四六時中どこでも会うことになるので、最終日には友人になっている、ということもAPAAでは珍しくない。

ランチもディナーも、その後のホスピタリー・スイートと呼ばれる懇親会も、すべて事務局側で用意してくれており、遠足までもが会合の中に組み込まれている。

アジアを中心とした代理人の間の、より親密なネットワークを構築する場として、APAAはまたとない機会を与えてくれる。

とはいえ、「結局、遊びじゃない？」とその意義に疑問を持つ声もある。

確かに、会期中はいっぱい遊ぶ。

レセプションが終わった後も、深夜まで有志により結成されたAPAAバンドの演奏の下、韓国発、世界中で大流行した（らしい？）ガンナム・スタイルをみんなで踊ってはしゃぎまくるなんてこともした。

しかし、そうやって一緒に踊って知り合った海外の代理人たちと、筆者は今、仕事をしている。





新たな出会い、または、既に仕事をしている相手と直接会い、面と向かって感謝を（苦情も）伝え、普段e-mailや電話では語れないような人生観や恋愛観まで語り合う……。そのなかから新たな信頼関係も生まれてくる。

skypeを自由に使いこなし、facebookやtwitter等でいくらかでも簡単に世界中とつながることができるご時世になっても、その場で生身の人間と会ってコミュニケーションを図ることにはかなわないと筆者は思う。

また、（これはAPAAに限ったことではないが）こういう会議に参加することで学ぶことは非常に多い。

日本や韓国のように、自国の参加者が極めて多い場合、自分のセールス・ポイントや、その国の代理人たちの中から、なぜその人を選びたいと思うのかについて、改めて考えさせられる。

仕事以外の話題でも、歴史や宗教（しばしば繊細なトピック）、文学、音楽、いかなる話題にも即座に話せる知識と語学力の鍛え方について悩む。

男性には無縁の話かもしれないが、芝生の野外パーティーでハイヒールは厳禁といったことを気にしながら、smart casualやbusiness attireといったドレス・コードを守り、いかに荷物を減らしつつ、“それなりの装い”をするかで試行錯誤する。

そして、一度会っただけでは絶対に忘れてしまうだろう人たちと、その後、どのようにコンタクトを継続し、多くの参加者の最終目的である、ビジネスに役立つネットワークを構築するかがその後の課題にもなる。

こうした事柄で出張前から悩まされる。APAAの年次大会とは、参加者の人間性が試される数日間でもあるのだ。

### 3. 課題と展望

APAAは現在、残念ながら中国の正式参加がない。Kwong氏が新会長となったことで、新たな展開があるかどうかに興味深いところである。

また、年々、会員のみならずアジア以外の国からのオブザーバー参加が増えていることから、「他の国際組織の会合と大差がないのではないか？」という懸念の声があるのも確かだ。

しかし、アジア自体が世界の中でその地位を再認識し、また、アジアの弁理士たちが集う会であるという地域の特殊性ゆえに人々が注目し、集まってくるという事実は貴重である。

今後も世界の中でのAPAAの存在に注目し、また、そのなかでどのように日本のプレゼンスを高めていくかについて考えていきたい。

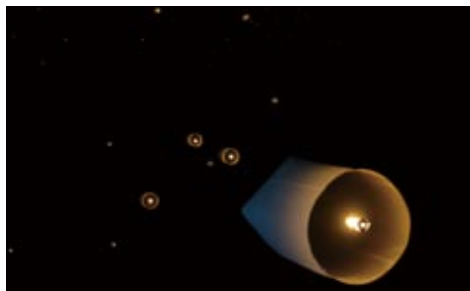
（あしはら えみ）



APAA10代目会長  
に就任した香港の  
Chi Keung Kwong氏



写真左から、吉田麻実子弁理士、筆者、堀江哲弘弁理士



APAAバンドによる生演奏

